

## コラム 井戸端での独り言 「コンパクトシティ」

コンパクトシティは、ダンツィクとサアティが1970年代に持続可能な都市に関する概念としてモデル都市を提案したものです。しかしその後は、実際の都市計画のあり方を含めて世界的に議論が展開され今日に至っています。前述両名の提案は日本においては非現実的であると批判された一方、少子高齢化の進行、環境汚染などの問題の深刻化、欧米の動向などを踏まえながら、青森市や富山市を代表としてさまざまな解釈を加えられながら展開されてきました。そして、東日本大震災の復興計画を含めて多くの地域で都市計画における理念のひとつとして掲げられています。

と、こんなどこにでもありそうな説明をつらつらと続けていても面白くありません。コンパクトシティというのは簡単に言うと、拡がり過ぎた都市構造を“ぎゅっ”とする考え方で、20数年前から国土交通省や一部の自治体で始められました。

もともと、都市というものは過密にする傾向がありました。昔のヨーロッパや中国の都市は城壁で囲み高密度にしていましたし、日本では平安京や城下町、山村部の集落なども考え方としては同じです。通信手段が今より格段に乏しい中で、見渡せる範囲くらいを高密度にした方が管理しやすく安全を保てたのです。ただ、過密になるとリスクもありました。時代が現在に近付いていく中で人口も増加し、伝染病や大火、公害など都市の高密度によって起きる問題がより顕在化してきたのです。電車や車、新幹線の登場により、人間の行動範囲が広がり短時間で遠距離に行くことが可能となりました。また、生活スタイルにも選択肢が増えてきて、過密であることが生活するうえで良いということでは無くなったのです。そして、都市の郊外化が進み、道路をつくり、公園をつくり、建物と建物の間を空けて、さらに日当たりを良くしてなど、これが1990年前後くらいまでの流れです。

しかし、バブルが崩壊し、右肩上がりの経済は想定できず、少子高齢化社会が見えてくると、密度を下げ過ぎたと感じるようになり、逆の働きが生まれてきます。これが都市構造を“ぎゅっ”とするコンパクトシティです。「郊外の大型店に負けないように商店街を守らないと」「車が多くて地球環境に悪いよね」「インフラ維持のためのメンテナンス費が大変！」「これからどんどん人口減るよね」など、こうした問題意識から再び高過密化へ舵を切ったのです。

さまざまな議論や評価はありますが、なんとなく日本全体としてどこの自治体も雰囲気的にはコンパクトシティを追認または支持しながら、ゆっくりと模索をしてきました。なんとなく新しそうな平凡な手法や考え方が都合よく加えられながら計画や政策が出揃ったところ、そこにコロナショックが起きたのです。

20数年間の議論など無かったかのように報道だけで見ると、「みんな離れて新しい生活様式を手に入れよう！」なんてことになっています。コンパクトシティは賛成論・反対論とさまざまな見解がありますからこれからどのような動きを見せてくるのか注目だと思えます。

安倍政権では時折「解釈」が話題となりますが、そもそも本来のコンパクトシティの捉え方について日本ではすでにその形を変えて、他国とは少し異なる独自のワードに変容してきたので、今後も多くの解釈を加えながら生きながらえて、「それでもやっぱりコンパクトシティ！」といった考え方が出てくるでしょう。

しかし、ここで重要なことは、これまで議論されてきたコンパクトシティの考え方をこのコロナショックを契機として見直す時ではないのでしょうか？ということです。ただ単純に「都市を縮小しつつ高密度化する」といった方法＝「土地、上の密度」では無く、「人の意思や行為を的確にコントロールすることで迅速に処理する方法＝「コントロール、上の密度」への転換です。格好をつけて結局意味不明な文章になっていますが、要するに距離的に近かろうが遠かろうが、自分の住みたい場所にながらテクノロジーの力によって距離を克服し、コンパクトシティの考えるメリットを享受できる世の中です。

トヨタの受け売りでは無いですが、「モビリティ社会」というのも、コンパクトシティの観点から語られていないだけで、要はそういった類のひとつだと思います。都市構造を変えて、嫌がる人も無理やり集めるのでは無く、今のままで密度をコントロールすることで暮らしやすい社会を構築する。難しいことは分かりませんが、この方が世の中として早く来るような気がします。中には「水道やガスはどうするんだ？」という意見もあるかも知れませんが、それは区域を前提にして近い遠い、今の配給方法のみで近い遠いと言っているだけで、そういったことは長い目で見たらいくらでも変えてしまえばいいわけです。

私の想像ですが、日本に初めて電話が出てきた時でさえ、集落にひとつしか無く、みんなで共同利用していたわけで、その構造を理解できず使わずにいた人もいたはずですが、それが今では一人一台になり、携帯電話という概念も変わって来そうな世の流れです。

コロナショックが今後の世の中にどのような作用をもたらすかは、すでに有識者をはじめ多くの方々が議論を始めています。コンパクトシティということだけでは無く、今後のキーワードのひとつは、良い意味での「コントロール」なのかも知れません。